研究者と巡るセメント美術

美術史研究者　坂口英伸

No.26　浦和画家

本稿では埼玉県の浦和（現さいたま市）を中心に活躍した芸術家たち、いわゆる「浦和画家」について紹介しよう。浦和画家という呼称から、画家が活動したとの印象を受けてしまいがちだが、ここでいう画家はいわゆる絵描きや絵師のみならず、彫刻家や詩人などを含む芸術家一般を指すものと理解されたい。

浦和画家の形成には、１９２３（大正１２）年に発生した関東大震災が関係していた。震災の被害を逃れるため芸術家の人的移動が起き、芸術家グループが形成されたのである。当時の浦和は震災の大規模被害を免れ、耕地整理事業によって宅地の整備が進められていたため、居住地として注目を集め、学者、文化人、芸術家などが移り住んだ。現在の別所沼（さいたま市南区）周辺に集まった彼らは、のちに浦和画家と総称されるようになったのである。別所沼はＪＲの中浦和駅から約３５０ｍにあり、現在では沼の周辺の約８万㎡が緑豊かな別所沼公園として整備され、人々が集う市民の憩いの場として親しまれている。別所沼を望む高台に位置するおよそ１０万坪の鹿島台が住宅地として整備され芸術家が居住したことから、別所沼周辺は「アトリエ村」「芸術家村」などとも呼ばれた。

そして１９５７（昭和３２）年には、公園の南側に埼玉県立美術館（現在の埼玉県立近代美術館の事実上の前身）が建設され、浦和画家たちはこの美術館を足がかりとしながら、埼玉県の芸術や文化を牽引した。

本稿で紹介する中野四郎（１９０１-１９６８）は、浦和画家を代表する彫刻家である。中野は山口県下関市の漢学者の家に生まれ、東京美術学校彫刻科本科木彫部に入学、卒業から２年後の１９３０（昭和５）年に浦和に移り住み、埼玉県でのセメント美術の新興に大いに貢献した。また、埼玉大学や星美学園短期大学で教鞭を執って後進の育成に励み、浦和で生涯を閉じた。

最初に紹介する《掛けた女》（１９６０年）は、別所沼公園の南西側、公園緑地協会の南側の池の中にある（図１）。これは中野が旗揚げした彫刻家団体「創型会」の第９回展に出品されたセメント彫刻である。左下に顔を向ける女性がバロック風の力強く堅実な表現で写実的に表現されている。２０２１（令和３）年には、埼玉県立近代美術館にて同館所蔵の中野四郎コレクションが披露された。

浦和画家たちがよく利用したのが浦和駅だ。同駅は日本鉄道（後の東北本線）が開通当初から設置され、東京美術学校・美術館・博物館などが数多く所在する上野駅へ通じていたため、浦和駅は浦和画家にとって芸術文化のハブとして機能した。かつての浦和駅西口ロータリーに設置されていたのが中野によるセメント彫刻の《平和の塔》（１９４９年）である。３人の童子が鳩を頂いた地球儀を下から懸命に支えている。同作の台座裏面に設置された銘

板によると、本作は「浦和市が戦後の街の荒廃に潤いを与えるため」に中野に制作を依頼したのだという。戦後のセメント彫刻としては最初期に位置づけられる作品だ。１９４０年代後半はまだ戦後の混乱期であり、日本中が物資不足にもあえいでいた。そんな大変な時期に誕生したのが本作なのである。

現在この作品は、南浦和駅に移設され（１９７２年）、ブロンズに改鋳されて（１９９１年）現存する（図２）。作品の経年劣化などを理由に、セメント彫刻がブロンズ彫刻へ置き換えられる事例は珍しくはない。戦時中は金属不足を理由としてブロンズ彫刻がセメント彫刻に置き代わったが、戦後はこの流れがいわば逆転したともいえる。

震災を契機とする人的移動が地方でのセメント美術の普及と浸透に寄与した点は無視できない。東京のみならず、地方とセメント美術、震災と美術などの関係性に目を向けるのも興味深い。



図１　中野四郎《掛けた女》（１９６０年）



図２　中野四郎《平和の塔》（原作は１９４９年、１９９０年にブロンズ改鋳）